

田中 浩先生のご逝去を悼む

2019年2月5日、名古屋大学名誉教授田中 浩先生が老衰のためご逝去されました（享年79）。現役時代の研究の粹にとらわれずに、新しい環境倫理学について探究を進められているところでした。

先生は、1964年3月に東京大学理学部物理学科をご卒業後、同大学大学院を経て、郵政省電波研究所の主任研究官を勤められた後、1978年3月に名古屋大学水圏科学研究所降水物理学部門の助教授に就任されました。1988年6月に教授に就任された後、1993年4月に大気水圏科学研究所物質循環部門、2001年4月から大学院環境学研究科地球環境科学専攻気候科学講座を担当され、2003年3月に定年により退職されました。その間、2期4年にわたって大気水圏科学研究所長を勤められたほか、名古屋大学評議員として大学全般の管理・運営にも貢献されました。その後、高野山大学非常勤講師を経て、2004年4月から2009年3月まで名城大学で教鞭を取られました。

学界においては、4期8年の長きにわたって日本気象学会の理事を勤められ、気象学の発展に貢献されるとともに、世界気候研究計画（WCRP）の成層圏過程とその気候影響（SPARC）の科学運営委員として成層圏気候研究の発展に貢献されたほか、文部省中核研（現・総合地球環境学研究所）設立委員、日本学術振興会専門委員、日本学術会議気象研究連絡委員会委員、科学技術庁「SPARC 国際共同研究」研究推進委員会委員、日本学術会議 WCRP 専門委員会委員を歴任され、我が国の環境科学全体の研究・教育に尽力されました。

先生の学術上の業績で特筆されるものは、地表付近で発生した内部重力波が下部成層圏で砕け、それによって生じた乱流が偏西風を減速させることを観測と理論の両面で明らかにされたことです。これは、中層大気国際共同観測計画において、大気球搭載風速計による風の微細構造観測と、鉛直一次元モデルの計算により得られた成果であり、山岳起源の重力波ドラッグが対流圏内の数値天気予報にも不可欠であること、そ



して山岳波消滅により、中層大気大循環生成に必要な移動性の波だけがさらに上方へ伝わることを示した意義が評価され、1989年度日本気象学会賞を受賞されました。

このほかにも、降水形成時の融解層の観測や梅雨前線付近の条件付き対称不安定の数値実験などのメソスケール降水現象、地球温暖化における積雲対流の役割、故小野 晃先生が研究されていた大気硫黄循環と気候へのインパクトなどの研究をされたほか、その対象は地球大気にとどまらず、金星の中層大気の力学の研究、木星の衛星エウロパ内部の水（液体）の存在の研究など、太陽系の惑星にも広がっていきました。そして、我が国における気象学・気候学ならびに地球環境学の研究推進への貢献が評価されて、2011年度日本気象学会藤原賞を受賞され、亡くなられた後に従四位瑞宝小綬章を受けられました。

このように素晴らしい業績を上げてこられた先生ですが、退職前にこれまでの研究生活についてお話を伺ったところ、大学院生のときに雨滴の振動などの雲物理実験や乱流の計算に取り組みましたが、なかなか成果が出ず、大変苦労されたようでした。その後、郵政省電波研究所で実施した音波レーダ観測で大気境界層上部の内部重力波が鮮やかに捉えられ、その魅力に取りつかれたとおっしゃっていました。当時、内部

重力波は、数値モデル計算の誤差要因になるなど、対流圏の気象学にとってどちらかと言えば邪魔者扱いされていたところ、米国のイリノイ大学において Marvin Geller さんや David Fritts さんとの共同研究（1975年発表）により、上部対流圏から下部成層圏における砕波による乱流発生、という大気力学上の重要性を明らかにできたことが大きな転機になったそうです。その後、米国航空宇宙局に滞在されたときに、大気循環モデルを使って内部重力波の効果を調べることを目指されましたが、滞在期間が十分でなく、それが果たせなかったことが今でも心残りである、とおっしゃっていました。

先生は、研究室ではコーヒーを飲みながら、学生とのおしゃべりを好まれました。にこやかな表情で、ときにジェスチャーをまじえて、研究内容から囲碁やスポーツなど多岐にわたる話題に花が咲き、時間が過ぎるのを忘れるほどでした。そのなかで特に印象に残っているのは、学生が研究結果を報告したときに問いかける「だから何（その結果の意味するものは何）？」という一言です。一見突き放したように取れるこの言葉には、結果が出ただけで満足するのではなく、その結果の意味やその分野における重要性を常に考

えなさい、という先生の教えが込められていました。

先生のご様子にそれ以前と比べて変化が見られるようになったのは、名古屋大学大気水圏科学研究所の所長2期目のときの中核研設置構想への対応に忙殺されたときだったように思います。研究所や大学の将来（環境学研究科設置）のみならず、日本の環境科学関係分野全体の発展を大きく左右するこの問題に対して、所内や学会内の調整から文部科学省との折衝に至るまで入念かつ全精力で当たられ、大変なご苦労があったと思います。

現役を退かれた後も先生の探究心は衰えることなく、これまでの研究や講義の内容を「大気科学とその周辺」として出版されたほか、大気科学小論や人間科学小論など数多くの小論文を書きあげられ、卒業生に配っておられました。また、現役時代の学問的束縛から解放され、環境問題、特に新しい環境倫理学を追い求めていきたい、と哲学や倫理学などこれまで興味を抱いてこられた学問をご自身のなかで融合し、世に発信されようとしていました。先生からの小論文が宅配便で届けられなくなることを思うと一抹の寂しさを禁じ得ません。先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（名古屋大学大学院環境学研究科 永尾一平）